

柿の実一つ

五割は自分のため、三割は家族のため、二割は人のために生きよ」、これは佐賀の名護屋小学校の養護教諭だった山田先生の言葉だ。先生は癌のため退職の後も自らを語る「いのちの授業」を続け、ついに昨年十一月末に天に召された。年末の報道特集では、食い入るように先生を見つめ、その話を聴く子どもたちの姿や、骨髄移植を受けた女兒が、先生との出会いを通して逞しく成長する姿が描かれていた。

私はこの感動的なドキュメンタリーに接しながら、杖塾取材に来たある記者との会話を思い出していた。すなわち、記者の「サラリーマン教師をどう思うか」の問いに対して、「子どもの寝顔しか見られない」という話を聞くことの多い私には、（その言葉は）ピンとこないですね」と答えたことである。：山田先生は「二割は人のために」と教えたが、養護教諭として、母として、妻として、果して五割も自分のために生きることができたのだろうかという疑問が私をとらえたからである。

青空を背に柿の実が残された梢が美しい。正月二日の朝、散歩のときのことである。人は「来秋も実りますように」との祈りを込めて残すのだという。こうした果実を「木守」という。しかし、真宗の伝道師である佐々木大観君はこの説を否定し、「生き物への布施のためだ」と主張する。すなわち「昔の人は貧しくとも、生かされていることに感謝しそうしたのだ」と主張する。彼は中学時代の友であり、同窓会後の茶飲み話でのことである。

お布施説の正否はともかく、還暦を過ぎてなお「ゆとりなき社会」に生き続ける私たち同窓生にとつて、この「柿の実一つのゆとり話」は、心温まる話であったのを思い出す。

「ゆとり」の文字を『明解国語辞典』（三省堂）で引くと、「何かしたあと、まだ自由にできる空間・時間・気持ち・体力などが有ること」とある。この「ゆとり」が最近なくなりつつある。だからうつ症状を訴える教師も増加する。その教師の多くが、この空間・時間・気持ち・体力の限界と、不自由さと、閉塞状態を訴えているのは、辞書の説明が妥当であることの証拠だと思う。縁あって杖塾を主宰する私は、せめて「柿の実一つのゆとり」をプレゼントさせていただくのが仕事と考えている。だから、「ここ（杖塾）に来るだけでほっとするんですよ！」と言ってもらえるのが最も嬉しい。

人間は月と同じで、太陽から光を貰うゆえに、地球を照らすことができる。私自身も貰わなければ、すなわち自前では、あげられない存在である。山田先生の遺言を教育の場で広めるためにも「ゆとりの創造」に向けての工夫が必要である。

：「五割が自分のため」で良い。相田みつをさんの詩に「人の為と書いて、偽（ニセ）とよむんだね」というのがある。偽物にならぬためには、自分を大切にすることだと自戒する私である。

